

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 3 年 6 月 17 日現在

機関番号：10101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2020

課題番号：17K03055

研究課題名(和文) 雪舟等楊の歴史学的研究 対外関係史・禅宗史の視角、文献史学の方法を中心に

研究課題名(英文) Historical Research on the Zen Monk Painter Sesshu Toyo: Mainly on the Literal Data Concerned Literal Data Concerned

研究代表者

橋本 雄 (Hashimoto, Yu)

北海道大学・文学研究院・教授

研究者番号：50416559

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の課題は、有名な禅僧画家、雪舟等楊を等身大に捉えることにある。近代以来「画聖」として特別視されてきた雪舟は、美術史学を中心に、20世紀末頃から本格的見直しが始まった。しかし、美術史学の枠内では自ずと限界があった。そこで、対外関係史や禅宗史、禅学の視点から雪舟の動静に改めて迫ることとした。その結果、雪舟は明の宮廷画家に師事した事実はないこと、入明時の雪舟の仕事は唐物目利(貿易品選定)であったこと、破墨山水の妙手・王維の継承者として自身を位置づけたこと、などを解明した。その他、雪舟の参加した応仁度遣明船にまつわる関係者(松雪軒全泉・天龍寺紹本・医僧呆夫良心ら)について詳しく検証した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

雪舟は、小学校でも習うほど有名な存在だが、彼の行状については分かっていないことの方が多い。明治以来、雪舟は海外留学による成功者として祭り上げられてきた。いわば、明治新政府の国策に沿った存在と位置づけられ、そのベクトルで雪舟関連史料が読まれてきたといえるだろう。しかし、近年いちじるしく進展した対外関係史(とくに日明関係史)や禅宗史、ようやく本格的検討の始まった禅学の成果に照らせば、史料の誤読や誤解が少なくなかったことが判明する。本研究の成果は、美術史学に文献史学などを架橋する役割を果たすとともに、著名な雪舟の姿を実証的に解明する点にある。学界のみならず、教育界にも広く貢献するだろう。

研究成果の概要(英文)：The task of this study is to capture the reality of the most famous Zen monk painter, Sesshu. Since the modern era, Sesshu has been considered sacred, but art historians have begun a full-scale review of his work since the end of the 20th century. However, as long as the framework of art history was adhered to, there was a limit to what could be done. Therefore, I approached Sesshu's movements from the perspective of the history of foreign relations, the history of Zen Buddhism, and Zen studies. As a result of my research, I found out that Sesshu did not study under any Ming court painter, and that his job at the time of his travel in Ming China was to select goods for trade, that he positioned himself as the successor of Wang Wei, a master of broken ink and landscape painting. In addition, other related parties (Shosetsuken Zenko, Tenryuji Shohon, medical priest Baifu Ryoshin, etc.) involved in the Onin-era envoy ship in which Sesshu participated were examined in detail.

研究分野：中世日本国際交流史

キーワード：雪舟等楊 五山文学 禅宗史 対外関係史 和・漢・梵 破墨山水 王維 遣明船

1. 研究開始当初の背景

雪舟等楊に関する学術的な研究は、近代日本国家の成立とともに開始された。落款による作品の同定が比較的容易で、基準作を定めやすいこと(実証性)、正統的な狩野派の祖に雪舟が位置づけられること(美術史の本流化)、海外留学による先進的な文化・技術の摂取(国際性)などが好まれたためである。雪舟は特別な存在とされたわけだが、その最大の焦点となるのが、雪舟の中国留学をどう捉えるか、あるいは、雪舟画と中国画の同時代性はどれほど認められるか、という問題だった。明代絵画の研究そのものの遅れもあったが、たとえ雪舟が中国に留学して画技を学んできたにせよ、彼の絵画作品は「日本の水墨画」だというのが1980年代までの通説であった。

ところが、1989年、雪舟画のなかに明代中国絵画(沈周ら)の要素を明確に主張した戸田禎佑の論が出るに及び、これまで「日本的」とされてきた雪舟画が、明代中国の要素を学んだものとして捉える視角が示された。これにより、戴進や李在といった明代宮廷画家らの作品との相同性が縷々検討されてきたといえる。

とはいえ、既存の研究は、例外なく明代中国画院画家の李在らに雪舟が師事したと想定してきた。これは、雪舟筆《破墨山水図》(東京国立博物館蔵)に著けられた雪舟の自賛の解釈に基づく理解である。しかし、申請者が同画賛を再検討した結果、そうした解釈はまったくの誤りであることが判明した。つまり、近現代雪舟研究の大きな前提は崩れ、雪舟が明朝宮廷画家李在らに師事した事実はなかったのである。

こうした成果をもとに、文献史学者として、雪舟関係史料を根底から読み直す必要性を感じた。とくに、研究代表者である私(橋本)がこれまで学んできた対外関係史(とりわけ日明・日朝関係史)に加え、近年飛躍的に深まりつつある禅宗史・禅学研究の成果を参照することで、新たな展開が見込めると判断した。言い換えれば、美術史上の“スーパースター雪舟”から、“一禅僧・一入明僧”としていったん等身大に捉えていこう、という試みである。

雪舟関連資料の多くは、五山文学に範疇化される難解なものが多い。また、近世中国史料に即した読解力も要請される。そうした意味で、これまでの史料読解には苦労や困難があったわけだが、昨今は、データベースや辞典類、あるいは訓読書などが徐々に増えてきた。つまり、こうした研究を推進するに足る学問的環境が整ってきたタイミングでもあった。

そして、雪舟絵画の美術史的な観点からの研究に関しては、21世紀に入り、歿後500年を記念して大規模な“雪舟展”が複数開かれ、最先端の議論を容易に総攬することができるようになった(東京・京都国立博物館編『雪舟』展図録、2002年。山口県立美術館ほか編『「雪舟への旅」展研究図録』中央公論美術出版、2006年)。そこからしばらく経った現在だからこそ、冷静かつ精緻に雪舟の絵画作品や関連史料を見ることができるようではないか。

以上のような学問的背景をもとに、雪舟等楊の歴史学的研究を進めてきた次第である。

2. 研究の目的

“画聖”とも称される臨済宗画僧の雪舟等楊は、小学校の歴史教科書で必ず取り上げられるほどの重要人物である(文部科学省の指導要領に規定されている)。にも拘わらず、彼の業績や行跡については、いまだ不明な点が多い。また、従来の雪舟研究は、おもに美術史研究の側から進められてきており、雪舟関係史料(文献史料)そのものの精緻な読みは、上述の「1. 研究開始当初の背景」にも述べたように、依然として課題として残されている。

近年、新出史料の発見により、拙宗等楊が雪舟等楊と名乗る時期が約10年さかのぼった。かつては、雪舟と名乗るようになったのは入明前後の応仁の乱の頃であり、入明して中国で修業したから画境に変化が生じたのだ、と解かれることが多かった。しかし、上記新資料の発見が導く結論は、雪舟の画風の変化は、入明のだいぶ前に起こっていた可能性が高い、ということである。

こうした新発見史料以外にも、実際には、雪舟関係史料を読み直し、旧来の誤解や思い込みを外していくことは必要であり、それにより、雪舟の実像に迫ることができるのではないか。

そして雪舟は、日本美術史のみならず、東アジア美術史のなかでも特別な重みをもっている。彼の作品をいかに理解し、東アジア絵画史のなかに位置づけるかは、他の作品群や画家を考えるうえでの重要な指標となるからである。

加えて、雪舟のもっていた学識や宗教思想、世界観などを闡明することは、画家としてばかり雪舟を見てきた従来の論調に大きな変更を迫るだろう。つまり、禅僧としては不当に低く見積もられてきた雪舟の等身大の姿や「実力」を、禅宗史の側に引き戻し、まっとうに評価すべきだということである。

以上のような学問諸分野に関する貢献が期待できるほか、日本の歴史教育を充実させるためにも、こうした研究は欠かせないと確信している。すなわち、雪舟に関する誤った説明を正し、より実証的に確度の高い説明を展開することは、ナショナリズム(雪舟の絵は日本風だ)やアジア主義(雪舟の絵は明代中国のそれに影響されている)の双方を相対化することにつながり、国際社会に開かれた市民教育・主権者教育に資することになるだろう。

3. 研究の方法

本研究は、これに先行する基盤研究(C)「中世日本の国際交流と文化の移入・翻訳・複合 和漢の政治文化論に向けて」(課題番号 25370756)の成果をうけて、とくに雪舟等楊およびその関係者に関する史料を、文献史学(対外関係史・禅宗史)・禅学(仏教学)の観点から徹底的に再検討する方法をとっていく(とりわけ、通常いわれる「和漢」だけではなく、「梵」(仏性・菩提・如来蔵)の要素を併せ考えるという視点を応用・敷衍する)。このことは要するに、上記「研究の目的」欄にも示した通り、雪舟等楊を美術史学の囲いから解き放ち、禅宗史の側にいったん取り戻すことを意味する。従来、とくに昨今の美術史研究では、禅僧としての側面をいちじるしく軽視してきたという認識を、研究代表者(橋本)は有しているからである。

こうした問題意識にもとづき、下記のごとき活動を主たる内容として研究を計画し、推進してきた(おもに COVID-19 の影響で、未遂のものもある)。

史料研究(典拠史料の再吟味) 禅宗史・禅学的視点、対外関係史的視点、雪舟関連地点のフィールドワーク(現地調査)の視角・方法を駆使するという方策である。

より具体的に記すと、
・
・
・
は、雪舟等楊やその弟子たちの事蹟に関する史料調査を意味する。既知の史料に関しても、日明関係史・禅宗史・禅学(大乘仏教)の文脈から新たな光を当ててみることはもちろん、とくに雪舟の絵画作品に関しては、これまで手薄であった文化財学的な調査を施す。こうした作業を積み重ねて、雪舟史料の根本的な再検討を行ない、新たな解釈の構築をめざす。

現地踏査については、東京、鎌倉、美濃(岐阜) 京都(相国寺など) 山口、博多、益田(島根) 豊後府内(大分)など、雪舟等楊の足跡をたどり、関連する寺院や遺構を踏査する予定であった。ただし、これについては COVID-19 の蔓延により、一部未遂に終わったが、それなりに実行できたといえるのではないかとはいえ、天橋立(京都日本海側)や美濃方面への訪問は、完全に見送らざるを得なかった。今後に期したい。

4. 研究成果

(1) 本研究の直前に発表し、本研究課題の直接的前提となったのが、拙稿「雪舟入明再考」(『美術史論叢』33号、2017年3月)である。本論稿はただちに中文訳され、台湾(中華民国)中央研究院発行の『共相與殊相: 東亞文化象徴的轉接與異變』(中央研究院中國文哲研究所、2018年8月)に掲載された。このことは、台湾の美術史・歴史学界で拙稿が一定の評価を得たことを意味しよう。

(2) 前掲拙稿「雪舟入明再考」で簡単な見通しにとどまった部分を中心に、雪舟筆・国宝《破墨山水図》の自賛の読解をさらに深めることができた(拙稿「雪舟と王維と」『美術フォーラム 21』38号、2018年11月)。すなわち、自賛は、雪舟が王維の継承者たることを広く宣布しようとしたものだという結論である。潑墨の画法で画かれた山水に、なぜ「破墨」の語をふくむ自賛が書き込まれたのかという点も、このように理解して初めて筋が通る。唐代の王維は、破墨山水の名手として、古来、東アジア世界で著名な人物であった。絵と文とがちくはぐだとしても、江南系水墨画の正統が雪舟に流れ込んでいたことが、雪舟自賛では主張されていたのである。

(3) 雪舟と同じ応仁度3号船で入明した千貫文衆の医僧呆夫良心は、日朝関係史の文脈ではそれなりに知られた存在であった。雪舟とともに帰国した後、畠山殿名義の偽使のメンバーとして朝鮮に通交していたことが知られる。そこで良心が共謀したのが、対馬宗氏のみならず、博多息浜の商人(興堂氏)であった。息浜はもともと大友氏の領地であり、大友氏との縁があって初めて良心も当地の商人と接点をもてたのであろう。つまり、つとに著名な雪舟が豊後府内に滞在することができたのも、良心という“つなぎ”があったからだという蓋然性を指摘しよう(拙稿「大友氏の日明・日朝交流」2018年11月)。

(4) では、そうした雪舟理解のキーパーソンの一人良心を、そもそも遣明船事業に引き込んだのは誰であったか。この点の解明は、著名な連歌師宗祇の交友関係のなかに見いだせた。宗祇の相国寺在学時代の旧友・恩人、吉祥院=松雪軒全呆である。この点は、国際日本文化研究センター主催「応永・永享期研究会」のシンポジウムにおけるコメント「雪舟・良心・松雪軒全呆と応仁度遣明船」(2019年3月、於・慶應義塾大学)で発見し、その後、その一部を拙稿「雪舟の入明事情」(『季刊・禅文化』257号、2020年7月)にて公表した。卑見の全体像については、2021年度中に「宗祇旧知の入明僧「吉祥院」とは誰か」と題して公刊する予定である。

(5) 最終年度において、これまでの研究成果のエッセンスをまとめた拙稿「雪舟入明の実像を求めて」(葛継勇監修/陳小法・橋本雄共編『新・日中文化交流史叢書 明代巻』収載、近刊予定)をものした。ただし、同論稿は、その重要性を評価され、叢書刊行に先んじて、中国・湖南師範大学の紀要(学術誌)にまもなく掲載される予定である。陳小法氏の強い懇請と高配の賜物である。

(6) このほか、雪舟を“一人の禅僧”として捉えることの重要性を示したものとして、拙稿「文化交流史から問い直す」(『日本宗教史』シリーズ第一巻、吉川弘文館、2020年9月)を著したほか、雪舟のみならず当時の宗教者・文芸エリートの有していた《和漢梵》等価値の世界観を、同稿および拙稿「珠光の嘆き」(『かなしむ人間』北海道大学出版会、2019年8月) 同「解説: 「場」と芸能の室町文化論」(村井康彦『武家文化と同朋衆』ちくま学芸文庫、2020年10月)などによって解明してきた。雪舟の抱く世界観が特殊なものではなく、当時の人々が広く共有し

ていた大乘仏教観（禅浄一致・維摩信仰など）と変わらないこと、雪舟を脱宗教化することの誤りを指摘したつもりである。

（7）なお、雪舟等楊に関する単著を公刊し、研究成果を広く江湖に問うことも計画していたが、遅れが生じている。もとより怠惰の極みと言わざるをえないが、大学のOnline授業に忙殺された影響が大きい。骨組みとなる個別研究の発表はほぼ片付いており、2021年中の脱稿・刊行を期するところである。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 橋本雄	4. 巻 38
2. 論文標題 雪舟と王維と：東京国立博物館本《破墨山水図》再説	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 美術フォーラム21	6. 最初と最後の頁 59-64
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 橋本雄	4. 巻 82
2. 論文標題 蒙古襲来絵詞を読みとく：二つの奥書の検討を中心に	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 SGRAレポート	6. 最初と最後の頁 37-51
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 橋本雄	4. 巻 なし
2. 論文標題 珠光「心の一紙」を読む	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 特別展図録『茶の湯』東京国立博物館	6. 最初と最後の頁 94-95
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 橋本雄	4. 巻 なし
2. 論文標題 徳川美術館所蔵「永楽帝勅書」の基礎的考察	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 東アジア古文書学の構想：現状と課題	6. 最初と最後の頁 63-84
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 橋本雄	4. 巻 257
2. 論文標題 雪舟の入明事情：応仁度遣明船の関係者から考える	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 季刊・禅文化	6. 最初と最後の頁 35-46
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 3件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 橋本雄
2. 発表標題 趣旨説明・討論司会
3. 学会等名 北大史学会（特別例会・シンポジウム）「済州島をめぐる東アジア海域交流史」（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 橋本雄
2. 発表標題 趣旨説明・問題提起：「近年の割符・為替研究に寄せて」
3. 学会等名 北大史学会（シンポジウム準備会）「中近世移行期日本の貨幣・信用・流通」
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 橋本雄
2. 発表標題 室町将軍家の東アジア外交
3. 学会等名 九州国立博物館「室町将軍」特別展記念講演会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 橋本雄
2. 発表標題 雪舟・良心・松雪軒全泉と応仁度遣明船：コメントに代えて
3. 学会等名 研究集会「応永・永享期文化論」（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 橋本雄
2. 発表標題 徳川美術館所蔵永楽帝勅書は別幅に非ず
3. 学会等名 科研費・基盤B朱印船のアジア史的研究（松方冬子代表）第9回研究会（明治大学）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 橋本雄
2. 発表標題 シナ海域における貴金属・貨幣の流れ：12～16世紀の日本を中心とした素描
3. 学会等名 科研費・基盤B西ユーラシア貨幣史科研（鶴島博和代表）研究会（下関市立大学）（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 橋本雄
2. 発表標題 日明勘合貿易船の経営構造
3. 学会等名 第9回海域ヨーロッパ研究会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計12件

1. 著者名 鈴木幸人（編著）、林寺 正俊、谷古宇 尚、阿部 嘉昭、笹岡 正俊、吉開 将人、橋本 雄、冨田 康之	4. 発行年 2019年
2. 出版社 北海道大学出版会	5. 総ページ数 296
3. 書名 かなしむ人間：人文学で問う生き方	

1. 著者名 九州国立博物館（編）、一瀬智、橋本雄、高岸輝	4. 発行年 2019年
2. 出版社 九州国立博物館	5. 総ページ数 304
3. 書名 室町将軍：戦乱と美の足利十五代（特別展図録）	

1. 著者名 永原陽子（編）、荒川正晴、橋本雄、ほか21名	4. 発行年 2019年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 384
3. 書名 人々がつなぐ世界史（ミネルヴァ世界史叢書4）	

1. 著者名 琉球船と首里・那覇を描いた絵画史料研究会（編）、荒木和憲、地主智彦、鈴木悠、津波古聡、豊見山和行、橋本雄、原田あゆみ、平川信幸、藤田励夫、外間政明、真栄平房昭、山田葉子	4. 発行年 2019年
2. 出版社 思文閣出版	5. 総ページ数 184
3. 書名 琉球船と首里・那覇を描いた絵画史料研究	

1. 著者名 松方冬子（編）、橋本雄、清水有子、川口洋史、原田亜希子、木村可奈子、岡本真、古川祐貴、増田えりか、彭浩、蓮田隆志、山本文彦、吉田信	4. 発行年 2019年
2. 出版社 東京大学出版会	5. 総ページ数 344
3. 書名 国書がむすぶ外交	

1. 著者名 鹿毛敏夫・坪根伸也（編）、五十川雄也、柴田圭子、荒木和憲、佐藤道文、林田崇、長直信、越智淳平、八木直樹、松原勝也、山田貴司、橋本雄、吉田寛、窪田頌、沓名貴彦	4. 発行年 2018年
2. 出版社 吉川弘文館	5. 総ページ数 331
3. 書名 戦国大名大友氏の館と権力	

1. 著者名 廖肇亨（主編）、島尾新、衣若芬、蔡毅、藍弘岳、林桂如、張辰城、陳韻如、橋本雄、林聖智、平川信幸、黃立芸、劉序楓、沈玉慧	4. 発行年 2018年
2. 出版社 中央研究院中國文哲研究所（台北）	5. 総ページ数 676
3. 書名 共相與殊相：東亞文化意象的轉接與異變	

1. 著者名 湯山賢一、杉本一樹、増田勝彦、大藤修、笹田悠、渡辺滋、高橋裕次、梅澤亜希子、高橋恵美子、橋本雄ほか、計43名	4. 発行年 2017年
2. 出版社 勉誠出版	5. 総ページ数 896
3. 書名 古文書料紙論叢	

1. 著者名 吉田一彦、上島享、林淳、橋本雄、ほか4名	4. 発行年 2018年
2. 出版社 吉川弘文館	5. 総ページ数 344
3. 書名 日本宗教史1：日本宗教史を問い直す	

1. 著者名 永井晋、ほか17名、橋本雄（計19名）	4. 発行年 2020年
2. 出版社 勉誠出版	5. 総ページ数 240
3. 書名 中世日本の茶と文化：生産・流通・消費をとおして（アジア遊学252）	

1. 著者名 村井康彦、橋本雄	4. 発行年 2020年
2. 出版社 筑摩書房	5. 総ページ数 480
3. 書名 武家文化と同朋衆：生活文化史論（ちくま学芸文庫）	

1. 著者名 橋本雄、ほか9名	4. 発行年 2021年
2. 出版社 北海道大学出版会	5. 総ページ数 306
3. 書名 再：くりかえす世界	

〔産業財産権〕

〔その他〕

researchmap 橋本雄
<https://researchmap.jp/read0099625>

北大文学研究科教員一覧 橋本雄
<https://www.let.hokudai.ac.jp/staff/hashimoto-yu>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------